

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

チーム木津総

～総合管理所と連携し取り組む防災操作～

昨年9月に発生した台風18号で、淀川水系は大規模な出水となり、木津川上流の5つのダム（高山、青蓮寺、室生、布目、比奈知）を管理する木津川ダム総合管理所（総管）では、5ダム連携操作に取り組み、名張川、木津川、そして淀川本川をも視野にした水位低下と洪水被害低減を図った。

今回は、先月号で紹介した総管の防災操作（洪水調節）を、実際に高山ダムで実行した梶島さんに当時を振り返ってもらおう。



高山ダム 平常時管理水位EL116.0m
(平成25年9月24日)

高山ダム 最高水位EL130.19m
(平成25年9月16日)

機械課職員の役目

「入社時の赴任先である懐かしの地へ帰ってきました。」取材に少し緊張した様子の梶島さん。「高山ダムは、阪神地区の水道の水がめで京セラドーム47杯分の容量を持っています。型式も変わっているでしょう？木津川5ダムの中では一番大きな貯水容量であり、『アーチ重力式コンクリートダム』とあって、全国でも数が少なく珍しい形なんですよ。」と続けた。

「私は、総管の機械課で、各ダムのゲート点検や工事発注の審査・手続きなどを行っています。」機械専門の職員は社内でも少ないとのこと、総管全体でもわずか9名。「点検や操作時に、各ダムに呼ばれることもしばしばです。」

Profile

木津川ダム総合管理所 機械課

梶島 篤訓 Atsunori Kabashima

平成6年水資源開発公団（現水資源機構）入社。高山ダム（京都府）、青蓮寺ダム（三重県）、寺内ダム（福岡県）、岩屋ダム（岐阜県）や豊川用水（愛知県）等で主に設備管理の機械設備担当として従事。また、大山ダム（大分県）や川上ダム（三重県）等の建設事業では機械設備の設計等に携わる。平成25年4月より高山ダム管理所に勤務。平成26年4月より現職。

いつも通りの防災操作からさらなる段階へ

「昨年の台風18号の時は、高山ダムに配属されており、機械担当職は私一人でした。」と、当時を振り返る。洪水時各ダムでは「下流巡視」「関係機関への放流連絡」「放流警報操作」「ゲート点検・操作」などを職員が分担して行う。高山ダムの職員はわずか6名。いざという時には、総管からも応援が駆けつける。当時も2名が応援に駆けつけ、8人体制で定められた業務を行ったという。「私は、9月15日日曜日の





早朝5時30分の第一警戒態勢発令とともに参集し、直ちに洪水吐き設備の点検を行いました。高山ダムは構造上、洪水吐き設備が10門もあるため点検も大変な作業です。それから操作室配置に就きゲート操作に当たり、ゲートからの放流を開始しました。」…いつも通りの防災操作、当初はそう感じたという。

15日深夜には降雨がさらに強くなり、翌16日未明には流入量が毎秒1,000m³ (3秒で25mプールが満杯) を超え、午前2時50分に高山ダムは第二警戒態勢となった。「名張川上流の青蓮寺・室生・比奈知の各3ダムから流下してきた水は高山ダムに入ってくるんです。だから、3ダムの操作状況と上流河川の水位状況には常に目を光らせていました。」そして従来の防災操作との“違い”を感じ始める。「いつも以上に水位上昇が早かったんです。高山は5ダムの中で一番洪水調節容量が大きいのに、ピーク時は10分間に30cmと、みるみるダムの水位が上がっていく…正直、不安になりました。」これまでダム管理の最前線で経験を重ね、操作に失敗が許されないことを身にたたき込んでいるからこそその“直感”だ。

そんな緊張の走る中16日6時頃、緊急対応で特別な防災操作を行っている同じ淀川水系桂川にある日吉ダム(京都府)と連携し、淀川の三川が合流する地点の流量を低減させるため、木津川上流の各ダムの貯留能力をフルに活用し、ダムからの流下量を抑えて洪水を貯め込むようにとの指示が総管より入る。通常は木津川^{ありいち}有市地点(木津川下流の狭窄部で国道の浸水が懸念される箇所)を見据えた操作をしている梶島さんにとっても初めての経験だった。

「ピーク時までには10分に1回、操作卓でのこまめな流下量の調整(ゲート操作)が必要でした。総管の操作指示内容を確認めながら、高山ダムでも流入・流出のトライアル予測計算を行って、細かな対応を心がけました。また、下流の市町・警察や消防など関係機関への確実な情報提供・連絡にも努めました。」

その後も、ダムの貯水位・流入量・流下量・画像

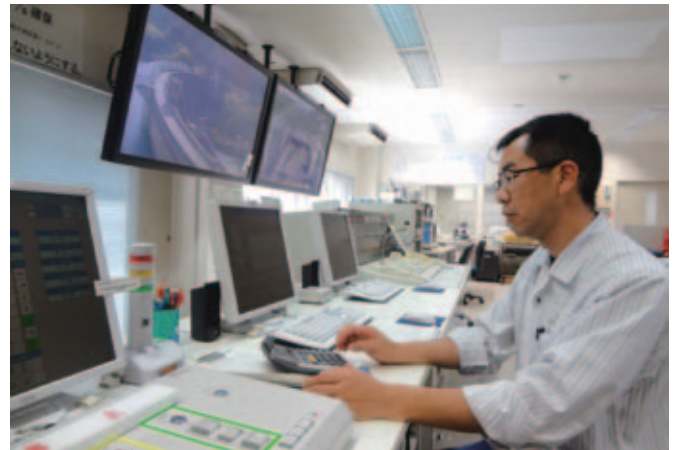
などのダム情報、雨量や河川水位のテレメータ情報、気象情報などの情報収集・分析・発信をしながらのゲート操作が続いた。30時間を超える夜を徹した作業を、集中力を切らすことなく確実にこなしていくうちに、下流の淀川は徐々に落ち着きを取り戻していった…。

チーム一丸となり、与えられた使命を果たす

今回の5ダム連携の防災操作をあらためて振り返り、「正直私自身は、今までにない役割を果たしているという実感はあまりわいていません。いつも通り、目の前の与えられた使命を果たしただけです。」と恐縮した様子。

しかし、総管からの指示に機敏に対応し、実行した成果は、総管が「土木学会賞技術賞」を受賞したことから明らかだ。防災本部の計画を5ダムのメンバーが的確に理解・実行し、双方でチェックし、次のステップへつなげる…総管全体のチームでの取り組みが実を結んだと言っている。「総管からは、いつも必要な情報が迅速かつ的確に専用回線を通して送られてきます。総管が5ダム全体を見とおして指示してくれているからこそ、私たち現場に限られた職員で、ダムの効果を最大限に活かす使命を全うできていると思っています。」

“設備を安く良いものに、自分で手がけて仕上げ、足跡・思い出に残る仕事をしていきたい”との夢をもつ梶島さん。これからもチームの貴重な一員であり続けることは間違いない。



3年ぶりに単身赴任が解消されたという梶島さんはスポーツ好き。「最近娘が学校でバレーボールを始めたんですけど、一緒にやってくれないんですよね…」と少し寂しそう。パパ離れに落ち込んだそんなときは、気分転換で飲み会へ!

「総管や各ダムの職員と一緒に飲みに行くこともありますよ。お互い気心を知っておくことは、連携した業務に必要不可欠です!(笑)」